

未定稿につき、本資料の内容に関する引用、及び、SNS等での対外的言及をお断りします。
本資料は、2020年2月に開かれた、愛知県立大学世界史セミナーでの報告資料を、一部修正したものです。(www.bur.aichi-pu.ac.jp/renkei/regionalalliances/017508.html)

鈴木 隆 (愛知県立大学外国語学部中国学科)
t_suzuki@for.aichi-pu.ac.jp

習近平氏とはどのようなリーダーか? : 政治認識、リーダーシップ、政治家像 ——地方指導者時代の著作内容を手がかりとして——

I はじめに

①「画期」としての習近平の登場

- ・習近平による長期政権の可能性
- ・既存の政治体制の下で「純粹培養」された初めての最高指導者
- 1949年の中華人民共和国の建国後に誕生 (習近平、1953年生まれ)
- 1978年の改革開放政策の開始とともに、党と政府の官僚政治家として経験を積み、指導部入りした初めての世代
- 行政級 (県→地区→市→省→中央) に応じて、一步一步、昇進

→中国国民党との内戦や日中・朝鮮・中越戦争などの対外戦争の遂行を通じて、カリスマ的指導者の地位を獲得した毛沢東や鄧小平とも、1989年の天安門事件後、鄧小平の鶴のひと声で、党総書記に抜擢された江沢民や胡錦濤とも異なる

→習近平=中国政界での影響力を今後も長期的に維持する見込みが高く、かつ、中国の今後の指導者候補の有力資格とされる「トータルキャリア型リーダー」の先駆け

※ 従来の制度論中心の研究史の流れに対し、それを前提としつつも、中国政治の現状に即した人物研究復権の必要性あり

②個人の政治思想研究の注意点

- ・一般的: 「一貫性の神話」「独自性の神話」(Q. Skinner)
 - ・中国共産党指導者の著作を読む場合には、次の点にも留意が必要
- 「無謬性の神話」と「言語の神話」

③習近平の略歴と利用可能な資料

- ・学歴: 法学博士: 清華大学人文社会科学院マルクス主義理論与思想政治教育、専業研究生
- ・職歴
河北省正定県委副書記; 書記 (●)
福建省アモイ市委常委、副市長
福建省寧徳地委書記 (●)
福建省省委常委、福州市委書記; 省委副書記、省長 (▲、■)
浙江省委副書記、代理省長; 省委書記 (●、▲、■)

- a) 習近平の各任期と同時期、または後年に、習の演説や文章を編纂して出版された史料集 (●)
- b) 中国の学術データベースに個別に収録されている、発表当時の習近平名義の演説・文章 (▲)
- c) 上記 a) b) に未収録の、任期と同時期に刊行された書籍に所収の習近平名義の演説・文章 (■)
- d) 上記 a) b) c) に未収録の、日本と中国の研究所・公文書館に所蔵されている各種資料

※ 正定時代、アモイ時代は当時の資料が極端に少ない。市委書記になった福州、および、地方時代最長の福建時代は個別の文章が大量にあるがまとまっていない

※ 最近では、習近平の各任地の関係者への回顧的インタビューを集めた書籍も続々刊行中
 例：『七年の知青歲月』（2017年8月） 『習近平在正定』（2019年2月）
 『習近平在厦門』（2020年1月） 『習近平在寧徳』（2020年1月）

④ 主な先行研究

- ・ 柴田哲雄『習近平の政治思想形成』（彩流社、2016年）
- ・ Willy Wo-Lap Lam, *Chinese Politics in the Era of Xi Jinping: Renaissance, Reform, or Retrogression?* (Routledge, 2015)
- ・ Richard MacGregor, *Xi Jinping: The Backlash* (Penguin Random House, 2019)

⑤ 筆者（鈴木）の現在までの部分的成果

- a) 大西康雄編『習近平「新時代」の中国』アジア経済研究所、2019年2月、計214頁
 ・ 執筆担当分：「第1章 政治構想、リーダーシップ、指導部人事の特徴」
- b) 菱田雅晴・鈴木隆『超大国・中国のゆくえ3 共産党とガバナンス』東京大学出版会、2016年
 ・ 執筆担当分：第3章「政治認識の根本としての『中国の夢』」、第4章「民主化なきガバナンス改善」、第5章「ガバナンス改革と統治システムの再編」、第6章「ガバナンス改革をめぐる習近平のリーダーシップ」
- c) 「六・四天安門事件前後の習近平：『擺脫貧困』に見る地区党委員会書記時代の政治論」『問題と研究』台湾・国立政治大学、第46巻第2号、2017年6月、55～85頁
- d) 「〈スタート地点〉の習近平：県党委書記時代の政治認識とリーダーシップ」『国際情勢・紀要』第87号、国際情勢研究所、2017年3月、45～62頁
- e) 「〈はじまり〉の反腐敗：県党委員会書記時代の習近平」『東亜』第593号、霞山会、2016年11月、30～39頁

II 習近平略歴

- ・1953年6月生
- ・北京市出身（原籍は、陝西省富平県）

期間	職位、肩書
1969～1975年	陝西省延川県文安駅公社梁家河大隊に入隊、知識青年、大隊党支部書記
1974年1月	中国共産党入党
1975～1979年	清華大学化工系基本有機結合專業、卒業
1979～1982年	國務院弁公庁、中央軍事委員会弁公庁秘書（現役）
1982～1983年	河北省正定県党委員会副書記
1983～1985年	河北省正定県党委員会書記 正定県武装部第一政治委員・党委第一書記
1985～1988年	福建省アモイ市党委員会常務委員、副市長
1988～1990年	福建省寧徳地区党委員会書記、寧徳軍分区党委第一書記
1990～1993年	福建省福州市党委員会書記、同市人代常務委員会主任、福州軍分区党委第一書記
1993～1995年	福建省党委員会常務委員、福建省福州市党委員会書記 同市人代常務委員会主任福州軍分区党委第一書記
1995～1996年	福建省党委員会副書記、福建省福州市党委員会書記、同市人代常務委員会主任 福州軍分区党委第一書記
1996～1999年	福建省党委員会副書記、福建省福建省高射砲予備役師第一政治委員 第15期党中央候補委員（1997～2002年）
1999～2000年	福建省党委員会副書記、代理省長、南京軍区国防動員委員委副主任 福建省国防動員委員会主任、福建省福建省高射砲予備役師第一政治委員
2000～2002年	福建省党委員会副書記、省長、南京軍区国防動員委員委副主任、 福建省国防動員委員会主任、福建省高射砲予備役師第一政治委員 （この間、1998年3月～2002年1月、清華大学人文社会学院マルクス主義理論・ 思想政治教育專業在職研究生班で学ぶ、法学博士号取得）
2002年	浙江省党委員会副書記、副省長、代理省長、南京軍区国防動員委員委副主任 浙江省国防動員委員会主任
2002～2003年	第16期党中央委員（以後、17・18・19期党中央委員）、浙江省党委員会書記、代理省長、 浙江省軍区党委第一書記、南京軍区国防動員委員委副主任、浙江省国防動員委員会主任
2003～2007年	浙江省党委書記、浙江省人代常務委員会主任、浙江省軍区党委第一書記
2007年	上海市党委員会書記、上海警備区党委第一書記
2007年10月	第17期党中央政治局常務委員（以後、18・19期中央政治局常務委員）、党中央書記処書記
2007～2008年	第17期党中央政治局常委、党中央書記処書記、党中央党校校長
2008～2010年	第17期党中央政治局常務、党中央書記処書記、国家副主席、党中央党校校長
2010～2012年	第17期党中央政治局常委、党中央書記処書記、国家副主席、党中央軍事委員会副主席、 国家中央軍事委員会副主席、党中央党校校長
2012～2013年	党中央委員会総書記、党中央軍事委員会主席、国家副主席、国家中央軍事委員会副主席
2013年～	党中央委員会総書記、党中央軍事委員会主席、国家主席、国家中央軍事委員会主席

Ⅲ 延川時代：政治生活の出発

①文革期、農村への「下放」

- ・父親（習仲勳）が党の高級幹部、しかし同時に、不幸のタネでもあった
→「黒帮の子弟」
- ・農村体験：貧困と不便な生活、肉体労働、農民との交流
- ・文革体験：紅衛兵運動と虚無の青年心理

②共産党入党

- ・のちに村の党支部書記に選抜（父親の名誉回復前、他の知識青年に先駆けて選抜）

Ⅳ 北京時代：政治的資源の原始的蓄積

①清華大学：学歴と人脈形成

②中央軍委弁公庁秘書（耿飆・国防部長の秘書）

- ・軍歴と人脈形成
- ・党政機関における《秘書》の重要性を実感

Ⅴ 正定時代：党政幹部としてのキャリア形成の開始

①経済・社会発展

- ・観光経済、省都への近接性を活かした「半城郊型経済」発展戦略など

②政治認識、リーダーシップ

- ・「調査研究」（毛沢東的指導スタイル）、現場重視
管轄地の頻繁な視察、住民アンケートなど（その後の任地でも同様）
→情報重視
- ・政策顧問団（特に、経済政策の立案策定）：メンバーは、北京人脈を利用した有名学者含む
- ・経済改革の進展とともに、反腐敗の取り組み強化（鄧小平の警告に基づく）

Ⅵ アモイ時代：改革開放の「光」の体験

①私生活の充実

- ・32歳の誕生日にアモイ副市長に就任
- ・彭麗媛との出会い、結婚

②統治における初体験

- ・市レベルの指導的ポストへの初就任
- ・改革開放の最前線としての沿海地域、「経済特区」+都市管理
- ・1980年代の目覚ましい経済成長
- ・アモイ対岸の金門島、その先の台湾の存在

Ⅶ 寧徳時代：改革開放の「影」の認知——格差と天安門事件

①経済・社会発展

- ・貧困削減と農業振興への尽力+鉄道建設などのインフラ建設への関心

・《海》への注目

農業振興の一部に、港湾開発や海面養殖、漁船団建設などの海洋経済の発展を含む
→ただし、海への注目は初歩的なものにとどまる

②政治認識、リーダーシップ

・天安門事件（1989年6月4日）への対応：北京から遠く離れた辺鄙な土地

→事件の認識：民主主義の段階性の強調＝文革的認識フィルターによる民主化運動への理解

教訓1：反腐败の強化（毛沢東と黄炎培の「ヤオドンの対話」に基づく）

教訓2：反「和平演変」のための思想・イデオロギー統制のグリップ強化

経済改革と思想統制の両面強化＝「両手抓」の強調（その後の任地でも同様）

・革命記念館の開設、党史工作の奨励

→《歴史》（近代史、党史）の重視：屈辱の近代の復仇、共産党史の連続性

→党史工作の奨励は、その後の福建・浙江の両省委時代も同様

VIII 福州時代：党政官僚としての一大飛躍

①私生活の充実：子ども誕生

②経済・社会発展

・福州市の独自性である「山、海、僑、特」の優位性の発揮（鄧小平「中国の特色ある社会主義」のスローガンに基づく）

→地域の独自性に即した発展のあり方の追求（以後の任地でも同様）

・経済発展への強い意欲

-1992年の「南巡講話」の発表以前から、改革開放に取り組む姿勢を強調

-鄧小平による南巡講話と「社会主義市場経済」構築の呼びかけに、積極的に呼応

→「改革開放の大潮が、神州の大地をもう一度席卷する」、省都の有利さ

・海洋経済の発展

「福州的希望在江海」（漁業、水産加工業、「海洋漁獲船団」、養殖など）

→「海上福州」建設の推進

・地域開発と対外開放を連結した長期の発展構想の提出（その後の任地でも同様）

-「福州市20年经济社会発展戦略設想」（3820プロジェクト）

-「閩江金三角経済圏」の構築

③政治認識、リーダーシップ

・毛沢東と鄧小平の理解：対外関係に関する毛（「独立自主」）と鄧（対外開放）の共通性を指摘

→「社会主義市場経済」確立に向けた、改革開放の再始動・再加速の正当化

・政治認識における国際的視野の広がり＋ナショナリズム信条の強化（「中華民族」の強調など）

→後者に関して、発露としての《歴史》と《海》の重視＝福州ゆかりの歴史的人物事績への注目

-洋務運動による「船政学堂」設立と海軍の近代化、中仏戦争（馬江海戦）の敗北

-林則徐、嚴復らの「志士仁人」への関心

→特に、嚴復への関心の高さ

④台湾政策

- ・福州対岸の馬祖島の存在
- ・台湾への2つの関心
- 反「和平演変」としての民主化経験（「台湾経験」）への警戒
- 経済成長のための台湾資本呼び込み、海外在住の華僑華人との結びつきの拡大強化

⑤軍との関係強化

- ・福州駐屯の陸海軍部隊への物質的サポート+慰問活動
- 第1回「全国双擁工作会議」福州開催（1991年）、福州は「全国双擁模範城」の称号を獲得

IX 福建省党委員会・省長時代：官僚政治家としての挫折、社会主義原理への沈潜

①経済・社会発展

- ・省党委員会副書記の専任時代（1996～1999年）には、農村工作の分業担当+予備役師団の第一政治委員
- 農政、「三農問題」（農業、農民、農村）の専門家との自他認識
- 農政に関する注目すべき主張もあり（情報重視、食の安全、農協などの利益団体の組織化など）
- ただし、習近平的「農村から都市を包囲する」戦略の挫折
- 浙江時代の2000年代には、「都市によって農村の発展をリードする」に転換
- 今日まで、農政の専門家としてのクローズアップの動きなし

- ・農政関連で、海洋経済の発展＝「海洋経済強省」の実現

・バランスのとれた発展

- 経済の量と質・構造転換、地域間の格差是正、環境保護（「生態省建設」）、医薬品食品安全など
- のちの、胡錦濤「調和のとれた社会」的論点の部分的先取り
- 特に、省内の山間部と沿海部との地域間格差の是正、協調発展の強調

- ・産業政策：「情報化建設」「数字福建建設」「信用文化建設」など

→《情報化》と《信用》の重視、次の任地の浙江では取り組み強化

- ・地域開発と対外開放：「海峡西岸繁栄帯」の構築

→福建省と台湾との経済連携の強化を念頭に置いたプロジェクト

②政治認識、リーダーシップ

- ・社会主義市場、及び、社会主義市場経済に関するの原理的探究を深めていく、関連する論文などの著作・業績もほぼこの時期に集中して発表
- マルクスの著作（『資本論』、「フォイエルバッハに関するテーゼ」など）、鄧小平理論
- マルクス主義経済学とケインズ主義の異同、開発経済学の中国における応用
- 中国の農業市場化
- 博士学位取得に向けた成果発表、実際には代筆であろうが、習近平の問題関心の所在と発想の特徴は分かる

- ・「領導小組」制度の活用

WTO 加盟領導小組、「数字福建」建設領導小組組長、林業分類經營領導小組組長など

- ・「強国」「強省」意識の高まり＝中国の「世界強国」グループ入りへの意欲
- 「農業大国→農業強国→経済強国」の発展図式
- 「生態強省」「海洋経済強省」「林業強省」の用語
- ・思想統制と社会治安対策の強化：「隱蔽戦線」の闘争、「沿海反浸透綜合治理工作」の強化
- 法輪功事件（2001年）
- 米軍機による駐ユーゴスラヴィア中国大使館爆撃事件（2001年）

・《歴史》と《海》の重視：福建省にゆかりのある歴史的人物や事績への注目
林則徐、嚴復、船政学堂などに加えて、鄭成功「海のシルクロード」も登場
→嚴復や鄭成功への高い関心＋福建革命歴史記念館への支持

・江沢民「3つの代表」への比較的冷淡な態度
→主に貧困層への支援として理解、新興エリート層への言及が少ない

・第15回党大会（2002年）での中央候補委員への最下位当選＝挫折と屈辱
→指導者への政治的接近の努力の認識高める＋選挙嫌いの一因ともなったか？

③台湾政策

・李登輝「二国論」と台湾独立への反対
→同時に、台湾のビジネスパーソンとの経済関係の維持強化の姿勢＋「三通」促進の呼びかけ

④軍との関係強化

・省予備役高射砲師団第一政治委員としてのアピール
- 「国防建設を支持することは、経済発展を支持すること」
- 「省長という政府高官でありながら、軍への理解が深い」との評価を受ける
→2000～2001年にかけて、台湾海峡情勢の緊張に伴い、「台湾軍との軍事闘争」の準備を強調

X 浙江省委時代：リーダーとしての基礎的完成、指導部入りの実績作り

①経済・社会発展

・「経済強省」実現のための「八・八戦略」
- 地域優勢の発揮：上海を中心とする「長江デルタ」の経済交流への積極参与
- 産業優勢の発揮：「先進製造業基地」の建設、「数字浙江」建設、「情報化をもって工業化を牽引」
- 体制優勢の発揮：「兩個毫不动摇」堅持、公有制・非公有制経済の共同发展
- 生態優勢の発揮：「創建生態省，打造綠色浙江」、循環経済と持続可能な発展
- 海洋資源優勢の発揮：「海洋経済強省」、「海洋資源を十分に利用し、海洋経済の発展を速める」
- 環境優勢の発揮：インフラ建設の加速化、行政機関效能建設、サービス型政府構築
- 人文優勢の発揮：「科教興省」「人才強省」「文化大省」の建設、「浙江精神」の発揚

・浙江民営経済への注目

→ただし、民営経済発展の具体策について、習近平本人は具体的なことはあまり述べていない

・「海洋経済」の発展、「海洋経済強省」建設

-東シナ海のカス田開発を含む、外洋への関心の高まり

-省内の杭州・寧波・舟山・温州など、海洋政策に関係する土地や機関への頻繁な視察

-2003年「全省海洋経済工作会议」：日中、日韓漁業協定などにも言及

-2006年は「鄭和下西洋600周年」

→福建時代の《海》への注目（沿岸漁業、地域間格差の是正）との質的違い

「世界経済の発展の歴史を縦覧すると、1つの顕著な軌跡とは、内陸から海洋へ、海洋から世界へ、そして強盛へと歩んでいくということだ。海洋時代の新たな優勢を、機先を制して占有するため、世界の海洋国家は、次々に海洋政策を調整し、海洋経済の発展を当該国家の発展の重大な戦略としている。わが国は、現代化建設の推進を速め、総合国力と国際競争力をさらに高めるため、海洋強国というこの経邦治国の新方略を、最近提出した。沿海省市もまた、それぞれ特色のある海洋経済発展戦略を相次いで提出した。海洋経済分野における国際・国内の競争が日増しに激しくなる様相〔態勢〕に直面して、我々は必ずや、長期的な戦略的まなざしをもち、海洋経済の発展を速め・海洋経済強省を建設することの重要な意義を十分に認識しなければならない」

②政治認識、リーダーシップ

・「領導小組」制度の活用

「財経領導工作小組」「省機関効能建設領導小組」「生態省建設領導小組」「省旅遊發展領導小組」「發展循環經濟建設節約型社会工作領導小組」「保持共産党先進性教育活動領導小組」など

・「中華民族の偉大な復興」への言及（ただし数はそれほど多くない）

→《歴史》の重視は変わらず＝「紅船精神」（浙江省嘉興市の南湖での一全大会、上海市での一全大会開催に関連）

→福建（寧徳、古田）、浙江（南湖）、上海（旧租界）へと、自らの任地に従って、党史を過去にさかのぼっていく中で、共産党の歴史と自信の政治的責任をより深く自覚していったか

・胡錦濤の「執政能力強化」のキャンペーン（2004年以降）

→習近平の国内統治観は、このころ基本的に完成＝暴力装置とイデオロギー統制

《一元的なイデオロギーで、価値志向の多様化した社会生活を統率する》という確信

「執政の地位を強固にし、執政安全を保障することを、極めて〔極其〕重要な位置に置かなければならない。軍隊に対する党の絶対領導を強化し、国家の主権と領土の保全を断固として守り、独裁の道具〔專政工具〕をしっかりと統制し、国家の支配機構〔国家機器〕の機能と役割を十分に発揮し、社会政治の安定を全力で守る。；世論の道具〔輿論工具〕をしっかりと掌握し、正確な輿論の方向性を堅持し、社会主義精神文明を建設し、イデオロギー領域における党の領導を全面的に強化し、党の思想政治工作の優勢を十分に発揮し、各種の誤った思想と腐敗した文化の浸食を有効に防止する」

「グローバル化は、経済上で体現されているだけでなく、思想文化上でも体現されている。経済のグローバル化に伴い、思想文化領域の交流と衝突は日増しに頻繁になり、イデオロギーの闘いは避けられない、哲学社会科学を内に含む文化ソフトパワーは、将来の地域経済及び総合国力競争において、日増しに重要な役割を備えるようになっていく。中国は現在世界において唯一の社会主義大国であり、敵対勢力が我らを滅ぼそうとすることは絶えることなく〔敵対勢力亡我之心不死〕、我らに対する浸透・転覆・干渉も放棄されたことはなかった」

「哲学社会科学は、科学であると同時に、イデオロギー性も備えている。社科聯組織と社会科学工作者は、みずからマルクス主義の世界観と方法論で、哲学社会科学のすべての領域の研究と教学を指導しなければならないだけでなく、強烈な陣地意識を打ち立て、いかなる陣地も我々が占領しなければ、一部の負のモノと敵対勢力が速やかにスキに乗じて入り込むであろうことを意識しなければならない。マルクス主義で占領してこそ初めて、負のモノと敵対勢力をして、生存の土壌を失わせ、そうして国土を真に守る〔守土有責〕ようにすることができる。一元化の指導思想をもって多様化した社会思潮をリードし、価値志向の多様化した社会生活を指導〔指導〕し、マルクス主義の名前がついているが誤った観点をはっきりと識別し、マルクス主義の科学性と指導地位を否定する誤った思潮には筋道を立てて意気盛んに反駁し、阻止しなければならない。とくに、学術のニセの名義のもとでの『西洋化』『分裂化』の陰謀については、分析的かつ深く掘り下げて有力に反撃しなければならない」

③軍との関係強化

- ・国防と軍隊の近代化への支持表明＝浙江は「祖国の海防の前哨」
「長期の平和的環境のために、現在、一部の同志の国防観念と、情勢や任務との要求の間には、依然として、多くの適応していない部分がある」

XI 上海市委時代：トップ就任への野心

- ※ 江沢民子飼いの部下の陳良宇の失脚に伴う、棚ボタ的な出世（政治局委員クラス）
・これをきっかけに、共産党のトップの地位を本格的に視野に入れ始めた

XII おわりに

- ・アマルガムとしての習近平？：継承発展と独自性
- 毛沢東＝政治、組織、イデオロギー
- 鄧小平＝近代化、発展、改革
- 胡錦濤＝社会経済改革

- ・残りの外交・安保政策は、習近平にとっては、数少ないオリジナルな手腕の発揮できるところ
→リーダーとして妥協の余地が少ない部分
→特に、「歴史」「海」「台湾」への接触とこだわりは、地方指導者時代からかなりのもの

以上